

●インタビュー：鈴木みどり代表に聞く

第3回「メディアと子ども」世界サミットに参加して

—研究者の企画と参加で数々の分科会、共通の問題意識と多様な実践—

2001年3月23-26日の4日間にわたって、ギリシャの北部に位置するテサロニケ市で第3回「メディアと子ども」世界サミットが開催され、世界85カ国から120名の子どもをふくみ、研究者・放送事業者・制作者・電波行政関係者・ユニセフ・ユネスコなどの国連機関関係者、ほぼ1000名が参加した。

サミットは、1995年に第1回会議（オーストラリア・メルボルン）、1998年に第2回会議（イギリス・ロンドン）と3年おきに開催されてきたものである（ガゼット No. 56, 1995とNo65, 1998、参照）。第1回サミットから続けて毎回招待されて参加してきたFCTの鈴木みどり代表（立命館大学教授）に、第3回サミットの模様についてメディア教育、メディア・リテラシーの分科会を中心に聞いた。

●メディア企業がサミットの中心に

—今回のサミットの特徴は？

今回だけでなく、今後も続いていくだろうと推測できるサミットの特徴がある。第1回を主催したのは「オーストラリア子どものテレビ財団」だったが、この財団の呼びかけでイギリスのBBCや日本のNHKという公共放送が当初から企画グループに参加していた。

6年後の今日、BBCやNHKは公共放送といっても巨大な放送事業体になってきており、世界市場にも進出している。たとえば、BBCの子ども向け番組「テレタビーズ」は世界を市場に販売戦略を展開しており、その典型的な例と言える。

NHKは、潤沢な資金を持っていることから番組の買い手として世界的に重要な位置を

占めている。子どものメディア問題の重要性が語られれば語られるほど、ニカラディオなどの子ども番組を制作・放送している企業が世界市場で占める役割も大きくなっていく。

このような状況のもとで、サミットも2回、3回と回を重ねるうちにメディア企業による作品のプレゼンテーションの場、取引の場になりつつある。今回も1000名の参加者が集まったが、その多くは主として作品の制作や売買に関わっている人たちだった。

メディア時代を迎え、子どもにかかわるメディア問題が重要であるという問題意識から始まったが、関心が高まれば高まるほど、子ども向けの番組制作が商売になってくるといふ自由主義経済の必然性、また、同時に進行しつつあるメディア市場のグローバル化現象を見ることができる。

●研究の重要性提起したプログラムの組み立て

—前回のロンドン・サミットでも業界主導で企画されたために、メディア・リテラシー教育や調査研究がプログラムの中心ではなかったと報告されていたが。

ロンドン・サミットでは、研究者の分科会が非常に少なく、そこに多くの参加者がつめかけ、会場があふれ返る状態だった。

一方、参加者の大半はメディア業界の人たちで、各国のメディア行政関係者も多く参加していた。今回もメディア行政関係者が全体会の報告者やパネラーになっていた。業界の力が大きくなればなるほど、メディア行政の役割が重要になってくるからだろう。

3 回目の特徴としては、前回に研究者の分科会が少なく、批判が大きかったことへの反省を踏まえたプログラムの組み立てがなされていることである。

プログラムを見ると、会期中の4日間、午前中は全体会で「メディアのグローバル化」「すべての人たちのメディア」「ニューテクノロジー」「子どもには発言する権利がある」という4つのテーマを柱に、毎日、複数のパネル報告があった。午後には、4会場でそれぞれのテーマごとに分科会が設けられていた。「子どもには発言する権利がある」をテーマとする分科会では、すべての発表者とパネラーが研究者だった。したがって今回は、全体の4分の1が研究者の分科会として設定されていたことになる。

プログラムの組み立てからも、研究者が役割を果たすことが重要であるという問題提起がなされており、その点は今までになかったこととして評価されていると思う。—今回のサミットで鈴木さんはどのような役割を果たしたのか。

私が関わったのは、4日目の全体会におけるパネルディスカッションでの報告と連日の午後開催された4つの分科会だった。3つの分科会で報告、他の一つではコーディネーターとして責任を持った。招待された研究者はみな同じように毎日、役割を担っており、相当ハードなスケジュールだった。

●多様な研究報告

—最終日の全体会が「子どもには発言する権利がある」だが、その模様について。

4日目の全体会では2つのパネルがあり、一つ目はユニセフのコミュニケーション部、フランスのCSA（フランス視聴覚最高評議会）といったメディア行政の立場からの報告が行われた。二つ目は「メディア・リテラシー、

メディア教育、コミュニケーション」と題して、12カ国の研究者が壇上に並び（プログラム参照）、それぞれの国におけるメディア・リテラシーの取り組み、メディア教育、あるいはメディアと子どもをめぐる最新の研究状況について報告した。一人7分という厳しい時間制限のもとでのパネルで、ほとんど討論する時間はなかったが、次々に行われる報告は、世界各地で展開しつつあるダイナミックな動きとその多様性を改めて確認させる“パノラマ”という感じだった。この領域の専門家であるスウェーデンの研究者が企画したこともあって、会場にいた多くのメディア関係者への訴求力は大きかったと思う。

●豊かな時間を共有

—午後のセッションとして開催された「子どもには発言する権利がある」の分科会はどのような状況だったか。

分科会は全体会会場から歩いて数分のビザンチン美術館の中で毎日開催された。世界各地の研究者、地元ギリシャ大学の学生や若手研究者が大勢参加して、大学の研究会といった雰囲気でも連日研究発表が積み重ねられた。

世界各国から来た研究者はほとんど毎日この分科会場で顔を合わせ、親しく議論し、充実した学びの時を持つことができた。

—共通した問題意識は？

それは、「子どもには発言する権利がある」ということで、子どもの権利条約が研究発表や議論の前提になっていることだ。子どもの立場にたつのは当然のこと、改めて強調する必要もないことだが、日本ではそのような共通の土俵に立って議論できる相手はそれほど多くはない。

また、今日のメディア状況のもとでクリティカルなメディア教育、メディア・リテラシーが必要であるという問題意識が研究の前提

として共有されていた。研究者が市民の立場に立っているのも当然であり、私としては立場を同じくし、何のために研究するのかという目的を共有している人たちと討論の時をもてたから、充実していた。

●子どもの側に立った研究

—調査研究の手法について感じたことは。

このような世界会議に出席していつも感じるのだが、メディア・リテラシー教育の前提として不可欠な子どもに関する調査研究が日本では非常に遅れている。なかでも、オーディエンス研究の立ち遅れが目立つ。

イギリス、スカンディナヴィア諸国では、研究者が個別の家族の協力を得て何週間も家庭の中にいることを許され、家族とメディアの関係を観察するというエスノグラフィックな研究を行い、環境としてのメディアをオーディエンスの側から究明する興味深い成果を得ている。能動的なオーディエンスとしての子どもとは、具体的に、どのようなメディアとの関係をいうのか、という問題意識で研究が進められている。

このようなオーディエンス研究は、メディアの影響とは何かとか、メディアの社会的規律・調整を考える上で、またメディア・リテラシー教育の具体化にとって、重要である。—研究者が何日も個別の家庭に入り込むことがなぜ可能になるのか。

研究者が市民の側に立っていることへの信頼感があるからではないか。日本では、研究といいながら商品開発の目的で行われるものが多いこともあり、研究者が社会的に信頼されていないように思う。

世界を見渡すと、研究者がメディアの側に立って行う研究は明確に区別されている。それは、メディア企業内研究者による分科会がわざわざ設けられていたことから、明らか

だ。むろん、メディア企業内の研究も重要だが、それは多くの場合、市場調査と直結している。

日本の研究者には、市民の側に立つという社会的な自覚と責任がもっとあっていい。それがないと信頼される研究はできない。

●ポケモン制作者の報告に議論続出

—一方で日本のメディア作品は、世界市場を相手にしているというアンバランスがあるのでは。

日本の作品は、技術的に優れていることもあり、子どもが飛びついてしまう。ポケモン現象がその一つだ。

今回のサミットでも、ポケモンが世界を席卷し、「ポケモン」研究が盛んに行われている状況から、日本のポケモン制作者が「すべての人たちのメディア」という2日目の全体会に報告者として招待されている。

このセッションでは、ポケモン制作者の報告が終わったとたん、大勢の参加者が質問をするためにマイクの前に並んだ。質問は、ポケモン現象が世界的にどのような意味を持つと考えているか、そのことをどのように自覚しているか、ポケモンカードなどを集めるといふ流行が作られて子どもたちの間に摩擦が起こっていることをどう考えるか、などという鋭い内容だった。

このような厳しい質問が相次いだのは、制作者の報告内容が、グローバル市場を相手にするメディア企業としての自覚を欠いていたことと関係があるだろう。

●子どもの権利の理解を深める必要

—今回も子どもたちは参加していたのか。

前回のロンドンと同様に、海外から招待された子どもとギリシャの子ども120名が会議と並行して独自のセッションをもち、ビデオ作品の制作もした。その作品が最終日に発表

され、賞賛を浴びていたが、率直に言って、内容的には「子どもの電子メディア憲章」を発表したロンドン・サミットの時の子どもたちによる作品の方がずっと創造性が高く、問題意識も明確だったといえる。子どもが制作するといっても、指導する大人が介在しており、介在者の資質や理解に左右される面が大きい。

サミットへの子どもの参加ということでは、その方法を再考する時がきているように感じた。1 回目のメルボルン会議の時は、パネルディスカッションに子どもたちが登場して非常にクリティカルな発言をすることに驚き、新鮮に感じた記憶がある。しかし、回を重ねるにつれて、国籍はさまざまでも英語を話すという「豊かさ」を背景とする子どもが主として招待され、アジア・アフリカ・ラテンアメリカなどの英語とは無縁の子どもは不在というような矛盾も目立ってきている。

メディア制作者の間でよく耳にする「どんな作品でも子どもが喜ぶからいい」といった捉え方や、サミットの運営にみるように子どもをただ持ち上げるやり方も、子どもの権利という観点から考えると、浅い理解ではないかと思う。この点についても、議論を深めていく必要性を感じている。

—昨年から今年にかけて、日本では子どものメディア環境に関わって「有害情報を遮断する」目的で自民党や民主党から法律案が提案され、それに対して、メディアの「表現の自由」と公的規制をめぐる議論が大きく取り上げられてきたが。

メディアの「表現の自由」などという議論は少なくとも私が出席した分科会ではまったくなかった。それは、子どもの側に立ってメディアのことを考えていくのが前提になっているからであり、メディアだけが表現の自由

を主張することはありえないからだ。

もちろん、メディア社会であるという現状認識のもとで、「有害情報を遮断」するなどという施策が提案されることもまったくない。世界に目を広げると、日本の議論は相当にずれているという印象をもつ。

—今回の会議では、研究者が業界関係者や行政関係者と議論する場面はあったのか。

国連関係者や電波行政関係者は「子どもには発言する権利がある」の分科会にしばしば来ていた。しかし、研究者が業界関係者と議論する場面はほとんどなかった。各テーマ別に分科会が組み立てられており、他の分科会の人びとと交流できない仕組みになっていたからだ。

(聞き手 西村寿子)

第3回「子どもとメディア」世界サミットのテーマとプログラム

全体会議（午前中）のテーマ

1 日目 メディアのグローバル化（GOING GLOBAL）

グローバル化の肯定的側面と否定的側面の両者にかかわる議論と挑戦

2 日目 すべての人たちのメディア（MEDIA FOR ALL）

良質のメディアに対するすべての子どもの権利を保障する取り組みとその必要性について論議する。機会の平等へむけて問題をどう解決するか。世界の多様な文化をグローバルなメディアにどう反映できるか。

3 日目 ニューテクノロジー（NEW TECHNOLOGIES）

子どもに向けたメディア・テクノロジーの開発、メディア製品開発への子どもの参加、デジタル・デバイドの問題などをとりあげ、ニューテクノロジーが娯楽とともに子どもの創造性や教育を促進することで私たちの生活を変え得ることについて論議する。

4 日目 子どもには発言する権利がある（CHILDREN HAVE A SAY）

世界各国の研究者がメディア研究、メディア・リテラシー、メディア教育の領域における最新の研究動向を報告し、メディア政策、子どもの権利などの子どもとメディアをめぐる問題について討議する。

[子どもには発言する権利がある]（CHILDREN HAVE A SAY）をテーマとするセッション

●全体会議（4日目午前中）

○開会のスピーチ

ギリシャ文化省大臣

○パネル1 子どもの権利

発言者：フォン・コール（ユニセフ・コミュニケーション部、米）／エレヌ・ファトゥウ（フランス視聴覚最高評議会＝CSA）

モデレーター：オルガ・リンネ（レッサー大学、英）

○パネル2 メディア・リテラシー、メディア教育、コミュニケーション

世界各国の研究者、メディア教育実践者が「子どもとメディア」に関する最新の研究について、また、それぞれの国や地域におけるメディア・リテラシー／メディア教育のアプローチについて発表し、討議する。

発言者：エリザベス・オークレール（子どもとメディア研究グループ GRREM、仏）／アヌーラ・グーナスケヴァ（アジア・メディア情報コミュニケーション・センター、シンガポール）／ケヴァル・クマール（プナ大学、インド）／ジェフ・リーランド（ワイカト大学、ニュージーランド）／ソーニャ・リビングストーン（ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス、英）／クリミス・ナビリディス（アテネ大学、ギリシャ）／イズマル・デ・オリベイラ・ソアレス（サオポーラ大学、ブラジル）／ジーン・プリンスルー（ナタール大学、南アフリカ）／鈴木みどり（立命館大学、日本）／サミー・タイエ（カイロ大学、エジプト）／エレン・ワーテラ（テキサス大学、米）／ブウ・ウェイ（中国社会科学アカデミー、中国）

モデレーター：オルガ・リンネ（英）

●「子どもには発言する権利がある」をテーマとする午後のセッション

1日目

○インタラクティブ・メディア(マスタークラス)

ビデオゲーム、コンピュータ、インターネット、インタラクティブな玩具、CD-ROM、などの役割に関する調査研究について討議する。

発表者：アリス・カーン（マークル財団、米）／キャサリン・モントゴメリー（メディア教育センター、米）／エレン・ワテラ（米）
モデレーター：オルガ・リンネ（英）

○メディア教育文化・キーワード（ラウンドテーブル）

背景や地域を異にするメディア教育実践者

たちが言語、文化、実践の相互関連性に焦点をあてつつ本質的なキーワードについて語る。

発表者：ジェフ・リーランド（ニュージーランド）／マリア・ミツォー（アテネ大学、ギリシャ）／ジーン・プリンスルー（南アフリカ）／マーク・レイド（BFI、英）／鈴木みどり（日本）

モデレーター：マイケル・メイマリス（アテネ大学、ギリシャ）

○子どもがテレビについてもっているイメージ（ラウンドテーブル）

世界のさまざまな地域で生きる子どもたちがテレビをどのようにみているか、テレビがどうであってほしいと考えているかについて、最近の比較研究結果に基づいて考える。

発表者：ルシア・バルデュッツ（ボローニャ大学、伊）／ファードス・バルビュリア（アフリカ子どもと放送フォーラム、南アフリカ）／アンドレ・キャロン（モントリオール大学、

カナダ）／レチア・カロニア（ボローニャ大学、伊）／テッサ・ドゥロケニ（テサロニキ大学、ギリシャ）／ケヴァル・クマール（インド）／タチアーナ・メルロ・フローレ（メディア研究所、アルゼンチン）／C.ペデウーセ（ギリシャ視聴覚研究所、ギリシャ）

モデレーター：ガレ・グレンガー（若い人たちとメディア国際研究フォーラム、オーストラリア）

2日目

○メディア暴力をめぐる論議（マスタークラス）

子どもや若い人たちに対する暴力的なメディア・イメージの影響、パラダイムの世界的な変化について討論する。

発表者：セシリア・フォン・フェリツェン（ストックホルム大学、スウェーデン）

モデレーター：オルガ・リンネ（レッサー大学、英）

○形成型リサーチ（マスタークラス）

ロシア、南アフリカなどにおける協同メディア開発プロジェクト「セサミワークショップ」を通して子どもの声を聞く。

発表者：シャーロット・コール／ライト・コール（セサミワークショップ、米）／アナ・ジェニーナ（セサミワークショップ、露）／ジュリアーナ・セレティ（セサミワークショップ、南アフリカ）

モデレーター：エレン・ワテラ（米）

○メディア教育の実践（ラウンドテーブル）

メディア教育の実践者によるデモンストレーションと討論。

発表者：アド・ヴァン・ダム（STOA、オランダ）／イングリッド・ゲレツェリーガー（メディア能力のための同盟、ドイツ）／ケヴァル・クマール（インド）／ジーン・プリンスルー（南アフリカ）／マーク・レイド（英）

／メニス・テオドリデス(テサロニケ映画祭、ギリシャ)

モデレーター：スザンヌ・キュルクセイ（教育科学・文化省、オーストリア）

3日目

○広告と子どもの消費行動(マスタークラス)

欧米諸国の子どもたちは豊かな消費者である。子どもが広告をどうみているか。また自分たちへの広告の影響をどう考えているかを年齢や国の違いによって考える。

発表者：パティ・ヴォルケンバーグ（アムステルダム大学、オランダ）

モデレーター：ジーン・プリンスルー（南アフリカ）

○ビデオとコンピュータゲーム（ラウンドテーブル）

ゲームは今日子ども向けテレビ番組制作よりずっと大きな産業となっている。子どもや若い人たちのあいだでゲームはなぜそれほど人気があるのか。その影響についても考える。

発表者：パティナ・ダブウ（アテネ大学、ギリシャ）／ピーター・ニッケン（オランダ青少年情報研究所、オランダ）

モデレーター：アヌーラ・グーナスケヴァ（アジア・メディア情報コミュニケーション・センター、シンガポール）

○メディア教育における“正統派”に挑戦する(ラウンドテーブル)

メディア利用の変化と新たな理論展開を視野にいれ、メディア教育の新しい実践方法について発表し、討論する。

発表者：スザンヌ・キュルクセイ（教育科学・文化省、オーストリア）／ジェフ・リーランド（ニュージーランド）／イズマル・デ・オリベイラ・ソアレス（ブラジル）／ジーン・プリンスルー（南アフリカ）／ブウ・ウェイ

（中国）

モデレーター：鈴木みどり（日本）

○メディアにおける子どもイメージ（ラウンドテーブル）

広告、新聞、テレビなどのメディアは子どもをどのように表現しているだろうか。

発表者：テッサ・デウルケリ（テサロニケ大学、ギリシャ）／セシリア・フォン・フェリツェン（スウェーデン）／鈴木みどり（日本）

モデレーター：ケヴァル・クマール（インド）

4日目

○意味を構成する子どもの能力（マスタークラス）

子どもは攻撃されやすいメディア消費者か、それとも“エンパワーされた”メディア利用者か。この二つのアプローチの違いについて論議する。

発表者：ダフナ・レミッシュ（イスラエル）

／ソーニャ・リビングストーン（英）

モデレーター：セシリア・フォン・フェリツェン（スウェーデン）

○メディア産業界で行われている調査研究（ラウンドテーブル）

いろいろな放送会社のなかで行われている調査研究について、その研究方法と調査結果を報告する。

発表者：アネッケ・デカー（オランダ青少年情報研究所、オランダ）／小平さち子（NHK放送文化調査研究所、日本）／ピーター・ニッケン（オランダ青少年情報研究所、オランダ）／イソベル・レイド、ジェーン・サンチョ（独立テレビ委員会、英）

モデレーター：バージット・タフテウ（デンマーク教育大学）

○変化しつつあるメディア環境を生きる子どもたち（ラウンドテーブル）

世界の子どもは種々さまざまなメディア

環境を生きている。伝統的なメディアからニューメディアまでを視野に入れ、子どものメディア環境について考える。

発表者：アレキサンダー・フェデロフ（タガンログ州教育研究所、ロシア）／イズマル・デ・オリベイラ・ソアレス（ブラジル）／カリロイ・パラギオトポロ（アテネ大学、ギリシャ）／サミー・タイエ（エジプト）／バージット・タフテウ（デンマーク教育大学）
モデレーター：アンドレ・キャロン（カナダ）

— 『fctGAZETTE』 No. 74(2001年7月)掲載 —